

山手小学校 6 年生から山本先生に質問です！

Q. どんない小学生でしたか？
得意な教科は何ですか？



川島 聡乃さん

A いつもぼんやりして、リーダーではありませんでした。自然が大好きで、外で遊ぶのが大好きで、近所の山をいつも歩き回っていました。化学の実験は大好きで、薬局のおじさんと仲良しになって試験管やアルコールランプ、簡単な試薬などを自分の小遣いで購入し、色々と混ぜて遊んだり、ロケットを作って飛ばしたり、あまり褒められた小学生ではなかったですね。今なら、大目玉を食うことでしょう。

Q. 有機化学の分野で、先生が今でもわからないことはありますか？



前田 七望さん

A わかっていることの方より、わからないことの方がはるかに多いです。実際のところ、わかっているのは万分の1にも満たないでしょう。だからこそ面白いし、挑戦のしがいもあります。

わかっていることと、わからないことを区別するのは大変に重要だと思っています。わからないことはわからないとはっきり言って、わかるまで諦めずに考え続けること、中途半端で承服しないこと。また、必要なら自ら調べること、実験することなどが化学の始まりです。繰り返しますが、もしわからないことがあったら、自分で本当に納得するまでわかったと言わないことです。

Q. いまの研究が将来どのようなことに役立てば良いと思いますか？



肥田 明大さん

A 研究を始めた若い頃は、自分にとって面白い研究や、それまでの世の中にはなかった化学を目指して、夢中で研究していました。しかし、年を取ってからは、世の中に何らかの形でご恩返しをしたいという気持ちが強くなって、今は数十年先のわが国の製薬産業の柱となる化学を目指しています。

Q. 研究を続ける上で、心の支えになっているものはなんですか？



長谷川 七穂さん

A この年齢になるまで長く自分で開いた領域を続けることができたという、開発した化学の研究分野(有機化学)に対する密かな自信でしょうか。

また、当たり前かもしれませんが、一旦始めたプロジェクトを諦めなければ決して失敗しないという信念もあります。

Q. どのようなことがきっかけで、有機化学の研究をしようと思ったのですか？



小野 佳苗さん

A 山手小学校の4年生の時の担任の新阜(におか)先生の影響が大きかったですね。この先生は毎日どんな問題でもいいから、自分で問題を考えて、その答えを書いてきなさいというそれまでになかった宿題を出してくれました。理科が好きだったので理科の問題を考え、自分なりの答えを調べて、毎日先生に見ていただくのが楽しみで、いつか理科が大好きになりました。また、新阜先生に教えていただいたことは、問題を解くより、問題を考えることの大切さです。

その頃、「少年朝日年鑑」という雑誌の中で化学の部分に原子や分子の構造の簡単な紹介があり、飽きるほどそこを繰り返し読んだのもいい思い出です。中学に入ってすぐに化学クラブに入り、そこでさまざまな実験をしているうちに有機化学が大好きになりました。

Q. 一番感謝している人は誰ですか？



譲原 さくらさん

A 母親ですね。どんなことでも決して命令しないで、私のことを見守ってくれた人でした。私のしたいことを何でもさせてくれました。

そのほか、新阜先生、京都大学の野崎先生、野依先生、ハーバード大学のコーリー先生、ウッドワード先生、数学者の広中先生、、、きりがありません。数えきれないほどいろいろな人に、人生の生き方と化学の真髄を教してもらいました。話し始めたら、1時間でも足りなくらいです。